

近世中後期の高座説教と出版

—— 粟津義圭を一例として ——

足 立 賀 奈 子

はじめに

江戸時代は、各宗派において宗学の研鑽に力が注がれた時代であった。浄土真宗本願寺派では寛永十六年に、真宗大谷派では寛文五年に学問の拠点となる「学寮」が創設され、幕府による学問の奨励、印刷・出版技術の発達も相俟って、東西本願寺における学事はますます発展した。

ところで、学寮を中心とした学問興隆の一方で、各地の寺院では布教師による布教活動もまた盛んに行われていた。近世期の布教師たちに求められたものは、わかりやすく法義の肝要を伝える能力はもちろんのこと、何より聴衆を飽

きさせない能力であった。例えば、本願寺派の菅原智洞は、近世中期の門徒の様子を次のように記している。

何寺ノ客僧ノ法談ハ上手チヤゲナト風聞ガアルカラ。
サラバ一座キ、ニ行カフト。米澤彦八ガ軽口噺力。
板東源八ガ軍書講談聞コ、ロデ。座ノ椽頭工野澤張上
リ佛ヘ御礼モ申サズニ懷手ニテ立ナガラ聞族ラモアリ。
このような状況は、宗教的なレベルにおいては嘆かわしく埒外な有様とみなさるべきものであろう。しかし、庶民を対象とする娯楽的な興行や出版文化を研究する立場からは、見過ごすことのできない重要性が認められる。つまり、当時は高座説教にも諸芸能と同じような娯楽性が求められ、布教師には巧みな話芸が必要であったということである。

そして、知的な好奇心に満ちた近世期の人々を聴衆・読者とした説教も勸化本も、十分に近世文学の研究対象となり得るということができる。

勸化本は、後小路薫氏のご研究によって解明されてきたとおり、近世庶民文芸の重要な一領域であるが、近世中期以降、これら勸化本の中に布教師の口演をそのまま記録して刊行したかのような版本が出現する。中でも、本願寺派の菅原智洞、大谷派の粟津義圭の著作は特に優れたものであると評されてきた。³⁾ 粟津義圭（以下「義圭」と称する）は、近世中期の真宗大谷派の学僧で、東本願寺高倉学寮で修学し、後に説教の分野で活躍した。義圭の説教の型は、後世にも大きな影響を及ぼしたといわれる。また、高座に上がる傍ら数多くの書物を著し、それらは長く真宗の布教師に支持された。

義圭の著作の多くは、説教台本のような体裁の書物であるが、中には読み物としての体裁をもつものも存在する。例えば、本稿で取り上げる『明応物語』（寛政五年刊）がそうである。その内容は、義圭の説教を筆録したものとされる写本『大坂建立御文唱説』（天明六年成）と類似することが判明している。『大坂建立御文唱説』の成立は『明

応物語』に先行するのだが、この両者を比較することによって、実際に行われた説教の口演が版本の読み物となる過程を知ることができる。³⁾ 本稿では、両者の比較を通して、高座説教が版本へ変容するその過程を明らかにし、さらに『明応物語』の流布についても言及したい。

一、『大坂建立御文唱説』の諸本と先行研究

写本『大坂建立御文唱説』は、その書名に示されるように『御文章』四帖第十五通「大坂建立章」を讃題とするものである。沙加戸弘氏は、「この書名で刊行された記録はないが、内容から見て『明応物語』を、実際に義圭が説教したものの筆記本である」とされる。現在知られる伝本は次の三本である。

① 響忍寺（滋賀県大津市）所蔵本（一冊）

…天明六年、光円寺円浄写。

② 円通寺（滋賀県草津市）所蔵本

…天明六年、光円寺円浄写。³⁾

③ 龍谷大学図書館写字台文庫所蔵本（三巻三冊）

…書写年不明

①響忍寺本の奥書は、「天明丙午天仲夏下旬／光円寺釈円浄筆（花押）」（図版1）。②円通寺本は未見であるが、沙加戸氏のご論考によれば、①響忍寺本と同じく「光円寺釈円浄」の奥書を有しているという。また、沙加戸氏は②円通寺本について「栗太郎栗東町小野の大谷派光円寺の当時の住職が、天明六年に粟津義圭の説教を筆記したものである」と述べておられる。③龍谷大学図書館写字台文庫本（以下「写字台文庫本」と略称）は、奥書がないため書写年や成立年は不明である。ただ、表紙や料紙、筆の墨付き等々、総合的に判断すると、成立は明治ではなく近世後期頃であると考えられる。なお、写字台文庫本の書誌は以下のとおりである。

○『大坂建立御文唱説』（三巻三冊）

龍谷大学図書館写字台文庫所蔵

函架番号 [124.3/65-w/1-3]

表紙 原表紙。錆青磁色、雲文菊唐草空押文様。寸法、

二二・二×一六・四cm。

外題 後補。表紙の左肩に墨書。

「大坂建立御文唱説 上（中・下）」。

内題 「大坂建立御文唱説 上（中・下）」。

丁数 上巻、三四丁。中巻、四一丁。下巻、三〇丁。
序跋 なし。

奥書 なし。

備考 本文、漢字片仮名。振り仮名（同筆）あり。訂正および頭注あり。響忍寺所蔵本とほぼ同文。

ところで、多くの場合、学僧の講義や布教師の説教を筆録した近世中後期の写本には振り仮名や頭注は存在しない。図版2はその一例で、『勸化熟詞』という書名が付けられた布教師のノートのような仮綴装の写本である。このような写本は、他にいくらかでも類例を見出すことができようかと思うが、写字台文庫本には、逐一振り仮名が付され、さらに頭注まで存在する。写字台文庫本が、文言の推敲や出題の明記等、後の補訂を経たものであることは明らかである。つまり、『大坂建立御文唱説』は、義圭の他の著作のように版本化されることはなかったものの、補訂や注を加えて筐中に納める価値を十分に有したものであったと考えられる。

二、刊本『明応物語』について

次に、刊本『明応物語』について述べたい。『明応物語』は、その序文に「蓮如上人御とし八十五歳明応八年三月廿五日、城州山科において御往生あそばされてより、年季遙にへだより三百回の御忌も程近くなり玉へば、遠近の寺院在家の内佛までも追々御遠忌の法会をまふけて」と記されるように、蓮如上人の遠忌に際し「中興御相承の恩徳を仰ぎ御在世の昔したひ奉る」ために刊行された書物である。

その内容は、先の『大坂建立御文唱説』と同様、『御文章』の本文を分割して掲げ、その後解説を続けるという形式で構成される。管見の範囲では、各種資料保存機関に所蔵される伝本は、いずれも二巻二冊の寛政五年刊本である。

その内の一例として、津市津図書館橋本文庫本の書誌を以下に記す。

○『明応物語』（二巻二冊）

津市津図書館（橋本文庫）所蔵

函架番号 [橋18・2-271~272]

表紙 原表紙。丁子茶色。寸法、二二・六×一六・〇cm。

近世中後期の高座説教と出版——粟津義圭を一例として——

外題 「御堂建立 明應物語 上（下）」原題簽（刷・双

辺）、左肩。

内題 「明應物語 上（下）」。

版心 「明應物語 上（下）（丁付）」。

匡郭 四周単辺。寸法、一七・七×二一・三cm。

丁数 上巻、三六丁。下巻、三三丁。

序末 「寛政癸丑の冬 江左義圭諦住書」。

刊記 「寛政五癸丑之春二月／京都書林 寺町通松原下

ル町 菊屋喜兵衛／東六条中数珠屋町 池田屋七

兵衛」。

印記 後見返しに伊勢の貸本屋の墨印あり。図版3を参

照。

備考 本文、漢字平仮名。

唱導文化圏に成立した写本が版本の読み物となることは、

近世文学の研究において重要な研究課題の一つともいえる。

たとえば、鈴木正三の会下に成立した写本の『因果物語』

（片仮名本）と版本の仮名草子『因果物語』（平仮名本）の

関係等が詳細に研究されてきた。『因果物語』の場合、平

仮名本の方は片仮名本を増訂した形となっている。読み物

としての結構を整えるため、文言の補訂や説話の増補は避

けられないものであったのだろう。しかし、『明応物語』の場合はその逆であった。後小路薫氏は、『明応物語』について「写本（『大坂建立御文唱説』のこと―筆者註）では譬喩・因縁譚として多く用いられている説話が、版本（『明応物語』のこと―筆者註）では切り捨てられ、本文が短くなっている」と指摘されている。そこで、本稿ではその「切り捨て」が具体的にどの部分で行われ、そこにどのような意味を見出せるのかということを再検討したい。

三、削除された説話

表1は、刊本『明応物語』となった際に削除された、つまり刊本には収載されていない説話を一覧にしたものである。写本と刊本の最大の相違点は、この説話の有無である。もちろん、これ以外の箇所は全て同じかというところではなく、經典の引用や表現の方法にも多少の相違点が認められる。しかし、それらは説話の有無と比較すれば、小異とみなし今回は触れずにおくこととする。

さて、『大坂建立御文唱説』に記される説話は、説教の譬喩・因縁として挿入されたものである。多くは中国種で

あるが、「和製類書」が多く流布していた当時の状況を考えると、義圭が原本から引用したのか類書から引用したのかを断定することは容易ではない。それらの説話は、經典の引用等の「堅い」内容の次に置かれることが多く、滑稽な説話を僧侶の巧みな弁舌で聞くことは、娯楽に乏しい時代、庶民にとっては大きな楽しみの一つであっただろう。そのことを考えれば、版本の読み物となる際には、平仮名本『因果物語』と同様に説話は増幅してしかるべきである。しかし、現状はその逆なのである。

義圭の著作では、「今モノノ如ク」という言葉を随所に見出すことができる（『大坂建立御文唱説』一二丁ウ等々）。この言葉は、現代の節談説教の大家である広陵兼純師の「ちやうど今もその如く……」という名調子をも思い起させるもので、なおかつ高座説教においては重要な役割をもつ文言である。つまり、その文言によって、「因縁」が結勸（結弁）へと結ばれていくのである。それを、明瞭に張りのある声で演じることにより、説話（はなし）と法義の境界は明確になり、聴衆は本筋を見失うことなく、結勸への経路を辿ることができる。もしもそれが不明確であったなら、聴衆には不満が残るであろうし、高座説教独特のすっ

表1 『大坂建立御文唱説』挿入説話一覧

・比較検討の際、『大坂建立御文唱説』は写字台文庫本、『明応物語』は津市津図書館本を使用した。
 ・①から④は議題として掲げられている『御文章』の本文である。本文は『浄土真宗聖典』（註釈版第二版／本願寺出版社・一九八八年）に依った。
 ・『大坂建立御文唱説』の本文には句読点が全く付されていないが、便宜上、私に読点を付した。
 ・『大坂建立御文唱説』の表記には、文字の省略や合字が随所に見られる。本表では、その全てについて意味する漢字・片仮名に変換して表記した。例えば、「コト」「トキ」「トテ」「ト云」「浄土」「阿弥陀如来」「菩薩」等である。このような写本特有の表記については、後小路薫氏著「勸化本写本にみえる省文」（『文藝論叢』第二十八号／一九八七年・大谷大学文藝学会）に詳しく、写字台文庫本の翻刻に際しても参考にした。

巻・丁数	記載出典名	内 容	結 び
①そもそも当国摂州東成郡生玉の庄内大坂といふ在所は、往古よりいかなる約束のありけるにや、	『西京雜記』	漢の「勝公」が馬に乗っていた時、東都門の前で馬が止まり、土の下から石櫛を発見。掘り出された石櫛には「石櫛は三千年後に掘り出され、勝公が亡くなって中に入ることになる」と刻まれていた。勝公がこの石櫛に入ることは、三千年も前に約束されていたことであった。	「往古より約束がある」とはどのようなことか。 蓮如上人が大坂の地に御堂を建立されたのは深い因縁のあること。
上5オ〜6オ	『神祕志』	「王果將軍」が益州の太守に就任の時、三峡という大河を船で渡ったが、そこで「石壁千丈」という高い山の頂に一つの棺があるのを見つける。棺の中の石には「三百年後に王果と遇い、王果によって再び葬られることになる」と刻まれていた。	

②さんぬる明応第五の秋下旬のころより、かりそめながらこの在所をみそめしより、すでにかたのごとく一字の坊舎を建立せしめ、当年ははやすでに三年の星霜をへたりき。		
上8ウゝ9オ ×	「モロコシノ苑文公」は、家来に立派な屋敷を建てるように強く勧められるが、苑文公自身は残り少ない余生、そのような煩わしいことはしないとの考えを貫き、隠居生活をした。	たとえ立派な住まいや財産を持って、往生する時は一人。財産に心をかけるより、信心に心をかけよ。
③これすなはち往昔の宿縁あさからざる因縁なりとおぼへはんべりぬ。		
④それについて、この在所に居住せしむる根元は、あながちに一生涯をこころやすく過し、榮華榮耀をこのみ、また花鳥風月にもこころをよせず、		
上24オゝ25オ ×	唐の「姚三老」はある富家の住んでいた土地を買って立派な屋敷にして住んでいた。そこに「王大痴」という者が訪れる。姚三老がこの土地を自分のものにするために様々に謀り、安価で買ったことを話すと、王大痴は「李徳裕が榮華の時分、山荘を造って大切にしたが、その後亡くなり子孫も滅んでしまった」という話をした。	世の無常のありさまはこのようなものである。榮華榮耀も金銀財宝も頼みにはならない。ゆえに後世を願い、仏道を志すことこそ大切である。
上25ウゝ27オ 劉向『説苑』	唐の「孟掌君」は榮華を極めたが、ある時、聞く人を必ず涙させるといふ琴の名人「雍周門」を知る。孟掌君は名人に演奏を頼み、自分を涙させてみよと言う。雍周門が、人は亡くなれば非情にも忘れ去られるもので、その侘びしさ、時が移ろうことの悲しさを切々と語ると、孟掌君は涙を流した。	
上30オゝ31オ ×	廬山の恵遠法師が「白蓮社」という念仏講を結社し、そこに謝靈運・陶淵明が入講を希望する。恵遠法師は、大酒飲みの陶淵明は入講を認め、実直な謝靈運は入講をさせなかった。その理由を問われて、陶淵明は信心が一途であるが、謝靈運は花鳥風月に現を抜かしているためであると答える。	信心の大切さと花鳥風月に心移すことの愚かさ。

上32ウゝ33オ	『太子傳首書』	聖徳太子臨終の場面。看病をする妻が水を差し出すが、娑婆の水は有漏不浄であるからと拒んだ。	上人も浄土への往生が近付きつつあったが、やはり娑婆の花鳥風月には少しも心を寄せなかった。
⑤あはれ無上菩提のためには信心決定の行者も繁昌せしめ、念仏申さんともがらも出来せしむるやうにもあれかしと、おもふ一念のころざしをはこぶばかりなり。			
中5ウゝ6オ	×	唐・後漢の頃、友人同士の徐儒子と郭林宗。郭林宗の母の忌中、徐儒子から「生薑」が供えられる。徐儒子は貧乏だが、友情に厚い。贈り物は粗末だが、高価な物よりもその友の志に郭林宗は大変感動した。	何よりも志が大切であり、祖師聖人への感謝と称名を心がける。
⑥またいささかも世間の人なんども偏執のやからもあり、むつかしき題目なんども出来あらんときは、すみやかにこの在所において執心のころをやめて、退出すべきものなり。			
⑦これによりて、いよいよ貴賤道俗をえらばず、金剛堅固の信心を決定せしめんこと、まことに弥陀如来の本願にあひかなひ、別しては聖人（親鸞）の御本意にたりぬべきものか。			
中21ウゝ22オ	『本朝語園』	延喜帝崩御の頃、日藏上人は岩屋で頓死したが、胸元が温かかったため葬儀を見合せていた。待つこと十三日目に蘇生し、冥途の委細を語った。日藏上人の語ることには、冥途では延喜帝の姿も見かけ、ここに至れば貴賤の区別はなく、罪のない者が貴いとされ、延喜帝は險阻な鉄の山々にのみ込まれた。	「貴賤道俗を選ばず」の意味するところ。
中23ウゝ24ウ	×	法然上人の在世の頃、月輪殿の御殿で上人の法談があった。月輪殿をはじめ堂上の歴々は、上人の側近くで聴聞できたが、熊谷直実（蓮性）をはじめ地下の者は上人から遠く離れた座で聴聞することしかできなかった。そのことを熊谷は「上人のお話を近くで	

中29才→30才	×	和泉式部は「貴布祢明神」に願いをした際、祢宜に「願いを叶えたいならば、幣を持って尻をまくり、神木を三度回れ」と言われるが、「千早振神ノミル目モハツカシヤ身ヲ思フトテ身ヲヤスツヘキ」という歌を詠み、尻まくりはしなかった。神が見ているということをも氣にかけ、目の前の望みのための短絡的な行動はとらなかった。	金剛堅固の信心について。世間の流れに流されて教えに背く行いをしなうことを戒める。
中30才→31才	×	一休和尚の頃、蜷川新右衛門は臨終の際に、二十五菩薩の来迎を見たが、平生は禪に心をかけているため、これは自分の願ひではないと来迎の如來に矢を向ける。これは天魔の所為で、臨終の際に新右衛門の心を惑わし乱すものである。	後生を思うことの大切さ。
中32才→33才	×	「しやせまし、せずやあらましと思ふことは、おほやうせぬはよきなり」(『徒然草』第九十八段)。思案することや思案の結果の決断することについて。	金剛堅固の信心の、悪鬼神の恐れるところ、信心のあるところには寄りつかない。金剛堅固の信心の大切さ。
中36才	『徒然草』		「決定」ということの重さ。
中36才→37才	×	「唐宋ノ小説二書タ」ものによると、「昔シモロコシ洞庭湖」で、長年、水難を避けられるよう祈りを捧げ続けてきた商人が、ある時大嵐であえなく水死した。商人の息子は水神を恨み、社に火を	信心決定の志の強固さ。

		つけると罵る。その夜、息子の夢に水神が現れ、父親の事故を謝り許しを請う。息子は火をつけることは思い止まるが、これは息子の決定した一念が、水神の胸にまでこたえた結果である。	
下4ウゝ5オ	×	祖父・曾哲、父・曾子、子・曾元の三代にわたる逸話。饗応の席で、それぞれが自分の父をもてなす時の姿勢について、父の望みを第一にすることが孝行なのか、自分が父を思いやって心を配ることが孝行なのか。	「本願にあひかなう」とは。雑行雑修を捨て、如来の心と行者の心が重なることこそが、本願にかなうということ。
下5ウゝ6オ	×〔蒙求〕か	文伯が露堵父を正客として招待した酒宴の席での話。露堵父は自分の器が最も小さいことに激怒し帰ってしまった。文伯の母は、文伯の非を叱責し家を追い出した。	報恩講の御座は親鸞聖人の御招待。どれほど内陣の莊嚴を精一杯飾っても、肝心の信心がなければ、満足にはならない。
⑧	それについて、愚老すでに当年は八十四歳まで存命せしむる条不思議なり。まことに当流法義にもあひかなふかのあひだ、本望のいたりこれにすぐべからざるものか。		
⑨	しかれば、愚老当年の夏ころより違例せしめて、いまにおいて本復のすがたこれなし。つひには当年寒中にはかならず往生の本懐をとくべき条一定とおもひはんべり。あはれ、あはれ、存命のうちにみなみな信心決定あれかしと、朝夕おもひはんべり。		
⑩	まことに宿善まかせとはいひながら、述懐のころしばらくもやむことなし。		
下16ウゝ19ウ	『宋高僧伝』 (唐鄭都開元寺 智誓傳)	才智聰明智の智誓法師が、苦勞して認められた話。地道に布教活動を続けた結果、多くの弟子を得た。過去に積み重ねた行いが宿縁となり、大きな実を結び成功を収めた。	門下と生まれたからは深い縁があつてのこと。宿善には事欠かない身であることを自覚すること。
下21ウゝ22ウ	×	「モロコシノ中牟」の百姓が、高齢になってから学問を始め、大変な努力をして天下に知られる立派な学者になった話。	学問に限らず、心をかけて精出せば本意を遂げることができる。

①またはこの在所に三年の居住をふるその甲斐ともおもふべし。あひかまへてあふかまへて、この一七箇日報恩講のうちに於いて、信心決定ありて、われひと一同に往生極樂の本意をとげたまふべきものなり。

下26ウゝ30オ

『源平盛衰記』

文覚上人の乗った船が嵐に遭った時の逸話。

きりと心に納得される終末を迎えることはできない。また、

「ちょうど今もその如く……」は、その言葉を言えはよいというわけではなく、声色・口調や間合いの取り方など、高度な技術が要求されるもののようである。^②

しかし、書物となった場合はどうかであろうか。このような説話がうまく機能するであろうか。説話は、読者を本筋から離れさせ、混乱させる可能性さえあるのではないか。つまり『明応物語』となったとき、それは蓮如上人の大坂御堂建立に至るまでの道のりを「物語」として通読できることの方が必要なのである。そこで、混乱をきたす説話は削除し、あくまでも物語としての体裁を整えるために再構成した。これが削除の理由なのではなからうか。同じ題材でありながら、高座における説教と書籍という伝え方、伝える媒体の違いが、このような相違を生んだのであろう。このことは、単純に説話を増幅していく近世前期の手法を凌駕するものであり、近世中期に至った一つの達成点とし

て注目することができる。

四、『明応物語』その後の展開

寛政五年に菊屋喜兵衛と池田屋七兵衛の相版で刊行された『明応物語』は、慶応二年に東本願寺の御用書林である丁子屋西村九郎右衛門から再刊された。版木は寛政五年版と同一であるが、いくつかの相異点が認められる。^③

刊記の改変や巻末広告の新補は当然のことではあるが、慶応二年版において注目すべきは挿絵が加えられたことである。また、その挿絵は、『明応物語』のために新彫したものではなく、既存の『絵本古今桜』（寛政七年刊）の版木を襲用したものであった。『絵本古今桜』は、わずか十四丁の絵本で、寺院造営の様子を描いたものである。^④

『絵本古今桜』の刊記には、須原屋茂兵衛（江戸）、柏原屋清兵衛（大坂）、菊屋喜兵衛（京都）、善屋勘兵衛（京都）、

菊屋七郎兵衛（京都）の三都五書肆が名を列ねる。この内、菊屋喜兵衛は特に注目を要するものであろう。なぜなら、菊屋喜兵衛は寛政五年刊『明応物語』の主版元であると考えられ、なおかつこの『絵本古今校』の刊行にも関与していたことが判明するからである。おそらく、菊屋喜兵衛が所有した『明応物語』と『絵本古今校』の版權が、双方とも丁子屋西村九郎右衛門に移り、その結果『明応物語』の再刊に際して両者を合体させたということなのであろう。

ここで、『明応物語』の二度の出版時期、すなわち寛政五年と慶応二年について考えてみたい。寛政五年は、先述のとおり、蓮如上人の子孫遠忌を目前に控えた時期であり、それに当て込んだ刊行であったことが想像できる。では、慶応二年はどのような年であったのだろうか。周知の通り、東本願寺は近世期に四度も火災を経験しているが、元治元（一八六四）年にも東本願寺の御堂は焼失の憂き目に遭遇した。そこで注目されるのが、『明応物語』の有する「御堂建立」というテーマである。御堂の再建に際して、中興蓮如上人のご苦労の様々を語るとは、極めて必然性の高い事柄であろう。また、商業的な観点から見れば、再建事業という話題性のある出来事に乗じた出版であったと

も考えられる。そこで、試みに、東本願寺再建の歴史と出版物の刊行とを重ねて見てみることにしたい。

近世期における東本願寺再建と出版物との関係

天明八年（一七八八）一月三十日

焼失①

寛政元年（一七八九）三月二十八日

釘始（御影堂）

◆寛政五年（一七九三）『明応物語』（菊屋喜兵衛・池田屋七兵衛）刊行

◆寛政七年（一七九五）『絵本古今校』（須原屋茂兵衛・柏原屋清兵衛・菊屋喜兵衛・善屋勘兵衛・菊屋七郎兵衛）刊行

寛政九年（一七九七）三月十日

御影堂落成

寛政十年（一七九八）三月二十三日

阿弥陀堂落成

文政六年（一八二二）十一月十五日

焼失②

文政十一年（一八二八）六月二十八日

釘始（御影堂）

天保六年（一八三五）三月

御影堂・阿弥陀堂落成

安政五年（一八五八）六月四日

焼失③

安政六年（一八五九）十月十一日

釘始（御影堂・阿弥陀堂）

万延元年（一八六〇）八月四日

御影堂・阿弥陀堂落成

元治元年（一八六四）七月二十日

焼失④

◆慶応二年（一八六六）『明応物語』刊行（丁子屋西村九郎右衛門）

慶応三年（一八六七）

再建発示

明治十三年（一八八〇）十月

釘始（御影堂・阿弥陀堂）

明治二十八年（一八九五）四月

御影堂・阿弥陀堂落成

『真宗年表』（一九七三年・法蔵館発行）を参照。

一度目の焼失は天明の大火によるもので、東本願寺も例外ではなく、京都市中の他の寺院と同様に被害が及んだ。

翌年には御影堂の釘始の儀式が執り行われたが、その後御影堂が完成するまでの間に『明応物語』と『絵本古今桜』が相次いで刊行された。二度目・三度目の焼失の前後には、関連した出版物の存在は確認できていない。四度目の焼失時は、そのおよそ二年後に新版『明応物語』が出版されている。わずかに二例ではあるが、『明応物語』の刊行が再建事業に向かう雰囲気盛り上げる目的をもち、なおかつそれに乗じた出版であったと考えることは可能であろう。

この東本願寺の再建事業は、一部幕府からの用材提供があったものの、費用や資材の調達、夫役の提供等々、大半が門徒の懇志に基づくものであったという。実に全国の門徒による巨大事業であった¹⁾。この状況を考えると、『明応物語』のような書物もまた、門徒の力を結集するための一助となり得たのであろう。焼失という困難から立ち上がり、御堂再建へ邁進しようするその氣運に、『明応物語』のもつテーマは好都合だったのである。そして書肆たちは時機をとらえ、効果的なかたちで出版を行ったのであった。

おわりに

以上、写本『大坂建立御文唱説』と刊本『明応物語』の比較により、近世中後期において説教の口演記録が版本となる際の、具体的な有様の一端が明らかになった。譬喩・因縁談として挿入された多くの説話は、物語の本筋を見失わせる恐れがあるため削除し、説教の場で多用された語りの語尾「ジャ」を削除した。それは一つの物語・読み物として再構成するという作業であった。読み物としての結構を整えるためには、近世前期に見られたような単純な増補ではなく、むしろ削除することで読者に無用の混乱を与えないよう工夫が加えられたと考えられる。

また、版本となった後には、蓮如上人の御遠忌といった宗派の話題、あるいは御堂再建に邁進する僧侶や門徒たちの需要を見据えて刊行・再刊された。このことは、高座説教から生まれ出た一本が商業出版と結びつき、新たな媒体によって、新たな目的のもとに展開していくという興味深い一事例であるといえよう。



図版 1-① 天明 6 年写『大坂建立御文唱説』（響忍寺所蔵）巻末



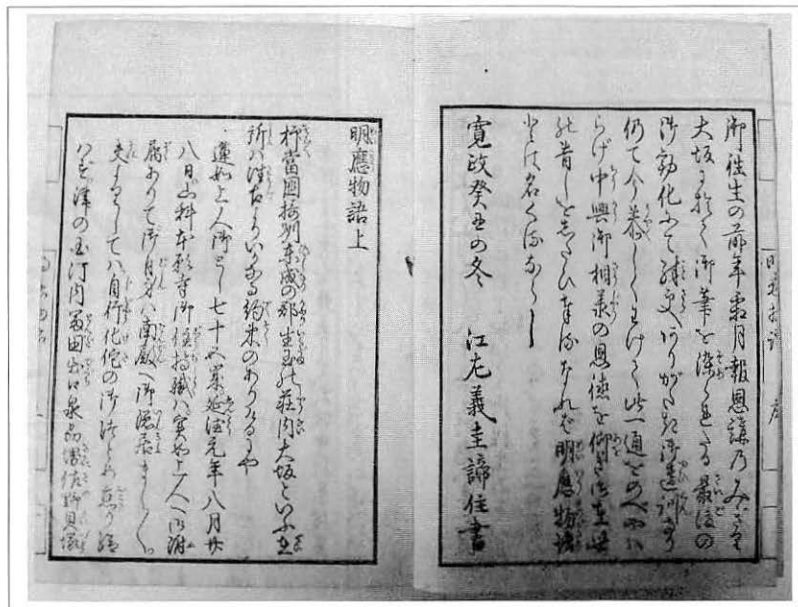
図版 1-② 同・奥書

城ヲ傾テ二度返リミハ國ヲ傾クニハ必ニメ
 漢ノ李夫人モ是ニ向ハセテ失ニ唐ノ楊貴妃モ
 是ミクニシテハ影無シ然ニ西施朝夕鏡ニ作向テ
 形ヲ作リシ己カ姿ヲ見テ歎テ市ニカミテ
 愛スト亦傀儡ハモハ唐四百金割ニカシテ思
 サミテ歎甚タミククモ何モイヤミソトガハ胸ニ
 カシ肩ハ頸ヨリモ高ク上リ髪ハ蓋ニ天ヲ指シ
 目鼻ハ上ニ向ニ兩ノ脚ヲ展トス見人駭キ問者
 笑フ致ニ鏡ニ向テ己カ姿ヲ照シ形ノミクキヲ恨ミ
 願リテ鏡ヲ大ニ投タトハ初ハ西施カ義人ミテ鏡
 ヲ愛メ吾ヲモ傀儡カ醜ヲ鏡ヲ投捨テ願ハモテ
 ニ事ゾ元ヲ尋ズルニ己カ姿ヲ愛メ傀儡ハモト馬ヲ
 放西施ハ鏡ヲ愛シ傀儡ハ鏡ヲ投ル若シ歎ハ假
 ナルモノ實体ナキ者ト思ハカカメヒ歎フキ様モ
 ナク又歌カミクヒ片歎クキヤラハナニ然ハ羅サノ
 相ハ本來實体ナキ者ニテ在ス○同是維摩方丈ノ
 室内ニ人ノ天女天降リ大衆微妙ノ法ヲ説ク舍利弗
 彼ニ在リ問テ曰ク汝何ソ天女ノ身ヲ改メサルヤト天
 ノ云ヤラハ五十二年ノ間タ人ノ姿ヲ求ムルニ不可得
 何ヲ改ムキ吟前ヘテイハ初術師ノ巾ヲ結テ牛馬ト
 ス是ニ實体アリヤ舍利弗ノ曰ク初術ハ實体ナキ者
 申ス初ハ諸法モ真莫如ク田男ヲ相ニ實体ナキ者
 天女神通シ以テ舍利弗ヲサトシ天女ハニ夕舍利弗
 トナル舍利弗是ヲ見テ大キニ敬馬レタトアラハサシタ

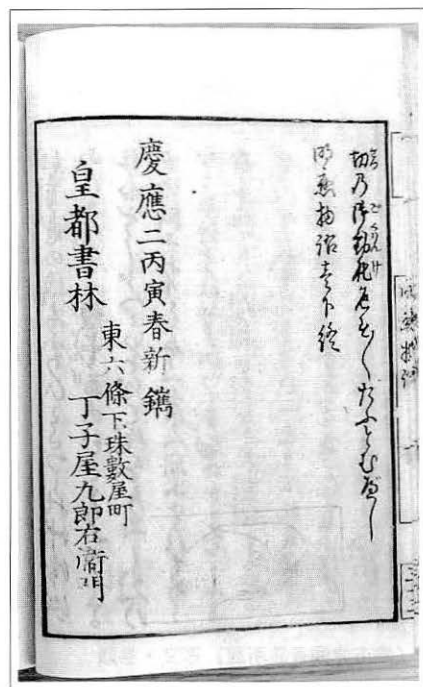
図版 2 正徳 4 年成立『勸化熟詞』（個人蔵）



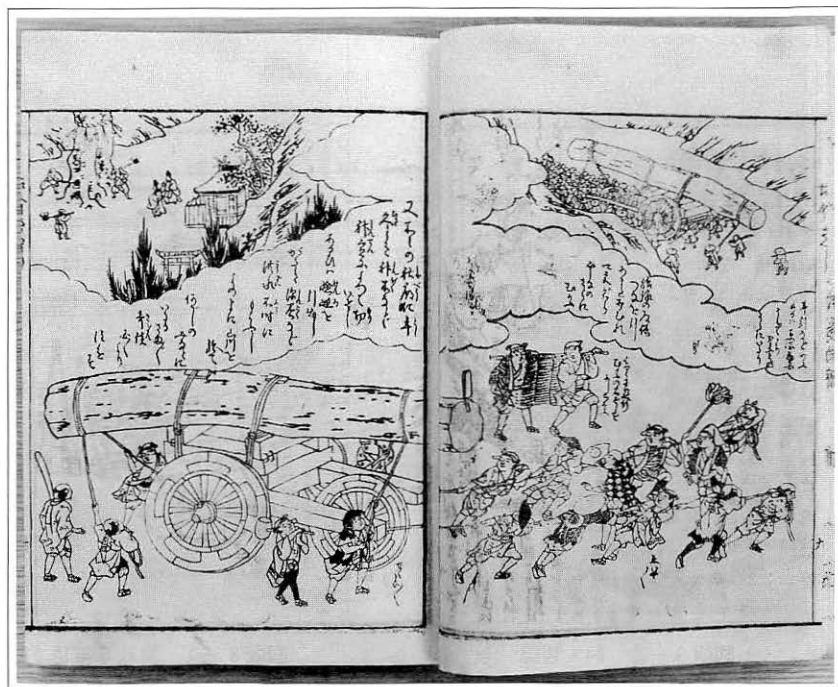
図版 3-② 同・刊記



図版 3-① 寛政 5 年刊『明応物語』（津市津図書館所蔵）序文・巻頭



図版 4-② 同・刊記



図版 4-① 慶応 2 年刊『明応物語』（金沢大学附属図書館所蔵暁烏文庫）下巻

註

- (1) 菅原智洞著『浄土勸化文選』（山内啓介氏編「勉誠社文庫」九十九・一九八一年より転載。）
- (2) 後小路薫氏『勸化本の研究』（和泉書院・二〇一〇年）
- (3) 関山和夫氏著『説教の歴史的研究』（法蔵館・一九七三年）、同『庶民文化と仏教』（大蔵出版・一九八八年）
- (4) 沙加戸弘氏著『粟津義圭著作目録稿』（『近江地方史研究』第七号／近江地方史研究会・一九七八年）、後小路薫氏著『義圭著述略考』（『文藝論叢』第二十一号／大谷大学文藝学会・一九八三年）。
- (5) 前掲（4）沙加戸氏論文による。また、図録『近江の真宗文化―湖南・湖東を中心に―』（栗東歴史民俗博物館・一九七七年）一〇六頁を参照。
- (6) 江本裕氏著『近世前期小説の研究』（『近世文学研究叢書』十二／若草書房・二〇〇〇年）
- (7) 前掲（4）後小路薫氏論文。
- (8) 和田恭幸氏（東保流・洗聲会会員）のご教示による。
- (9) 寛政五年版との相違点は、上巻見返し・序文・巻末広告の新補、刊記の改変である。慶応二年刊『明応物語』は、

金沢大学附属図書館暁島文庫所蔵本および関西大学総合図書館所蔵本を参照した。

- (10) 増補された挿絵には、『繪本古今校』の十四丁全てを襲用している。挿絵の丁の柱刻には、「古今さくら（丁敷）」と残されたままとなっている。

『繪本古今校』は、内題には「大堂造営」とあり、釘始・地築にはじまって、山中での巨木伐出、運搬、木場の様子、柱立や上様式等が描かれた繪本である。『繪本古今校』の内容や諸本間の相違等々は、青木馨・安藤弥「三河大谷派記録―近世・近代東本願寺教団史料―」（『同朋大学佛教文化研究所紀要』第二十六号／同朋大学佛教文化研究所・二〇〇七年）に詳細に述べられる。

- (11) 青木馨・安藤弥「三河大谷派記録―近世・近代東本願寺教団史料―」（『同朋大学佛教文化研究所紀要』第二十六号／同朋大学佛教文化研究所・二〇〇七年）、青木馨「『東本願寺寛政度再建絵伝』とその背景」（『同朋大学佛教文化研究所紀要』第二十五号／同朋大学佛教文化研究所・二〇〇七年）

（本学大学院博士後期課程）